

【第 42 回世界新体操選手権大会】

【個人総括】

個人では、今大会の一つの目標としていた個人総合決勝進出を、両選手ともに果たすことができなかった。一方で、今シーズン重点的に取り組んできた強化の成果を、世界選手権という舞台で確認することができたことは一つの収穫であった。

今シーズンは、演技構成の価値を高めることだけでなく、「持っている構成を確実に得点へつなげること」を大きな課題として、冬のアフシーズンから、DA の正確性、DB における身体難度の誤差の改善、A（芸術）・E（実施）の得点向上に重点的に取り組んできた。審判の先生方から国際的な評価基準に基づく助言をいただきながら、一つひとつの技の精度、作品の見せ方、演技全体の完成度を高めてきた。

その成果として、A では喜田選手がリボンで 8.000 点、鈴木選手がボールで 7.900 点を獲得した。作品の世界観や身体表現など、これまで取り組んできた芸術面が国際舞台でも一定の評価につながったことは、今後に向けた大きな手応えとなった。

また、喜田選手はフープで 27.900 点（DB8.2／DA4.2／A7.6／E7.9）を獲得した。特に DA4.200 点、E7.900 点という評価を得たことで、一つの種目ではあるものの、精度の高い演技を実施することができれば、世界の上位選手と戦える得点に到達できる可能性を示すことができた。

鈴木選手についても、4 種目すべての DA で 3 点台を安定して獲得しており、現在残っている細かな不成立や実施上の課題を修正し、さらに正確性を高めることで、4 種目を通して DA4 点台を目指せる段階まで力を高めてきたことを確認することができた。

このように、今シーズンの取り組みが得点として表れ始めた一方で、世界の上位へ進むために越えなければならない差も明確になった大会であった。

喜田選手は 3 種目合計 22 位で、個人総合決勝進出となる 18 位まで 0.850 点、鈴木選手は 26 位で 2.250 点届かなかった。昨シーズンから着実に力を伸ばしているものの、世界選手権という舞台における 0.850～2.250 点の差は決して小さなものではない。

今後、個人総合決勝進出、そして 2028 年ロサンゼルスオリンピックの出場権獲得を目指すためには、4 種目を安定して 27 点台後半へ乗せることに加え、1～2 種目では 28 点台中盤を狙えるだけの競技力を身につけていく必要がある。

そのために、まず大きな課題となるのが DB である。今後は構成価値そのものを 0.5～1.0 程度引き上げるとともに、構成した難度の成立条件を確実に満たし、さらに実施における誤差や減点を最小限に抑えながら、持っている DB を確実に得点として残していく力が必要と

なる。

今大会では、身体難度の誤差が少なく、質の高い実施を安定して行う選手が上位に位置する傾向が改めて見られた。ロシア、ベラルーシの選手たちが国際舞台へ戻り、身体難度の質がさらに高まっていく中では、単に難度価値を上げるだけでは十分ではない。どの身体難度を選択すれば確実に得点できるのかを見極め、誤差や四肢の減点を極限まで抑えた身体難度を本番で発揮できる力を身につけることが最重要課題となる。

DA については、4 種目すべてで 4 点台を安定して獲得することを目標としたい。そのためには、確実にカウントされる DA を選択することに加え、0.4 の価値を持つ DA をより多く取り入れられる技術力が必要である。また、それらの DA を作品の流れの中で無理なく構成できるよう、技だけではなく、音楽の選択や作品構成の段階から戦略的に考えていく必要がある。

A についても今大会では一定の成果が見られたが、世界トップ選手と比較すると、演技全体のエネルギー、スピード、迫力、そしてフロア上で審判を引き込む説得力には、まだ差がある。高難度の技を正確に実施しながら作品の世界観を表現することは容易ではなく、ミス避けようとするだけで演技が小さくなれば、構成価値で追いついたとしても最終的な勝負では上位選手を上回ることは難しい。

今後は、ミスをしないために安全にまとめることだけを目指すのではなく、高い構成価値に挑戦しながら、それをスピードとエネルギーのある演技の中で正確に実施する力を身につけなければならない。練習段階でミスが出たとしても、必要な技術を習得するまで粘り強く挑戦し続け、それを最終的に試合で確実に発揮できる力へとつなげていくことが重要である。

今大会を通して、世界との差は依然としてあるものの、今シーズン取り組んできた方向性が得点として表れ始め、世界と戦うために何を伸ばすべきかが、より具体的に見えてきた。2028 年ロサンゼルスオリンピックの出場権獲得に向けては、DB・DA の構成価値と正確性をさらに高めるとともに、A・E を含めた演技全体の完成度を引き上げ、4 種目を通して世界と勝負し、確実に得点を積み重ねられる競技力を身につけていかなければならない。

団体が今大会でロサンゼルスオリンピックの出場権を獲得した一方、個人にとっては、ここから出場権獲得に向けた新たな挑戦となる。今大会で明確になった成果と課題を次の強化へ確実につなげ、個人においてもロサンゼルスオリンピックの出場権を自らの力で勝ち取ることを目標に、選手、指導者、審判をはじめ関係する皆様と連携しながら、日本全体でさらなる競技力向上に取り組んでいきたい。